

**5/3,AB/2**

DIALOG(R)File 351:Derwent WPI  
(c) 2007 The Thomson Corporation. All rts. reserv.

0009281313

WPI ACC NO: 1999-210736/

XRAM Acc No: C1999-061853

**Oily solid cosmetic for eye shadow, lipstick**

Patent Assignee: KOSE KK (KOSE-N)

Inventor: ISHIHARA Y; MATSUSHITA A

2 patents, 1 countries

**Patent Family**

Patent	Application			
Number	Kind	Date	Number	Kind
JP 11049657	A	19990223	JP 1997219206	A
JP 3557542	B2	20040825	JP 1997219206	A
				19970730
				199918 B
				200456 E

Priority Applications (no., kind, date): JP 1997219206 A 19970730

**Patent Details**

Number	Kind	Lan	Pg	Dwg	Filing Notes
JP 11049657	A	JA	6	0	
JP 3557542	B2	JA	8		Previously issued patent JP 11049657

**Alerting Abstract JP A**

NOVELTY - The cosmetics contain 0.01-3 wt% of phosphoric acid group surfactants, and 5-40 wt% of tabular fine particles having mean particle diameter ranging from 1-400 mum.

USE - For eye shadow, lipstick and foundation agent for cheek.

ADVANTAGE - The cosmetics has excellent emollient feeling. The cosmetics has long-lasting property.

Basic Derwent Week: \*19\*\*99\*18

(51)Int.Cl.<sup>8</sup>A 6 1 K 7/48  
7/00  
7/025  
7/032  
7/035

識別記号

F I

A 6 1 K 7/48  
7/00  
7/025  
7/032  
7/035

L

審査請求 未請求 請求項の数2 FD (全6頁)

(21)出願番号

特願平9-219206

(22)出願日

平成9年(1997)7月30日

(71)出願人 000145862

株式会社コーセー

東京都中央区日本橋3丁目6番2号

(72)発明者 松下 篤

東京都北区栄町48番18号 株式会社コーセー<sup>一研究所内</sup>

(72)発明者 石原 由佳子

東京都北区栄町48番18号 株式会社コーセー<sup>一研究所内</sup>

(54)【発明の名称】 油性固型化粧料

(57)【要約】

【課題】エモリエント感が高く、粉っぽさが無く、化粧持続性に優れる等の品質を有しながら、且つ、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラとした仕上がり感を有し、溶融充填性にも優れた油性固型化粧料を提供する。

【解決手段】リン酸系界面活性剤0.01~3重量%、平均粒径が1~400μの板状粉体5~40重量%を含有することを特徴とする油性固型化粧料。

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 次の成分 (a)、(b)；

(a) リン酸系界面活性剤0.01～3重量%

(b) 平均粒径が1～400μの板状粉体5～40重量%

を含有することを特徴とする油性固型化粧料。

【請求項2】 更に成分 (c) として、平均粒径3～50μの球状粉体1～30重量%を含有することを特徴とする請求項1記載の油性固型化粧料。

## 【発明の詳細な説明】

### 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は油性固型化粧料に関するものであり、さらに詳しくは、エモリエント感が高く、粉っぽさが無く、化粧持続性に優れる等の品質を有しながら、且つ、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラとした仕上がり感を有し、溶融充填性にも優れた油性固型化粧料に関するものである。

### 【0002】

【従来の技術】従来、油性固型化粧料は、アイシャドウ、チーク、ファンデーション、口紅等の製品に用いられている剤型であり、固形油を含む油剤と粉体を混合した後、固形油の融点以上に加熱溶融し、容器又は皿に直接流し込み、冷却固化して製造されるものである。これらの製品はエモリエント感が高く、粉っぽさが無い仕上がり感、化粧持続性に優れている。しかしその反面、油剤配合量が多い為、使用時のベタつき、のび広がりの重さ等の使用感が固型粉末化粧料に比べて劣るものであった。このため油性固型化粧料に、のびの軽さ、油剤のベタつき解消や仕上がりのサラサラ感を付与させる目的で、粘度が低く使用感の軽い油剤や球状及び板状粉体が配合されてきた。また、溶融流し込み充填という簡便さから、充填される容器も従来のプレス成型のものと異なりその形状、材質は多岐にわたっていた。

### 【0003】

【発明が解決しようとする課題】油性固型化粧料に固型粉末化粧料の長所である、のび広がりが軽く、サラサラした仕上がり感等のパウダリーな感触を与えるには、板状粉体や球状粉体を配合する必要がある。しかしながら、これら粉体の配合量が多くなると、加熱溶融時の粘性が高まり著しく流動性が低下することにより、容器又は皿へ流し込み難くなるか、又は、容器又は皿内で化粧料が広がらず、表面が凹凸になったり、しわができたり、容器又は皿の形状によっては容器の端に隙間を生じる等の外観品質を著しく低下させる場合があった。従来この欠点を解決するため、溶解温度を高くしたり、充填後ヒーターで充填品の表面を加熱して平滑にする等の対応が行われてきた。しかしながら、この方法では、高温で長時間溶解あるいは充填を行なったり、ヒーターの加熱を長時間行なうことにより、バルク自体の変質を起こすだけでなく、樹脂容器の場合には、熱による変形を生

じることがあった。また、板状粉体や球状粉体の配合量が多くなり過ぎると、溶解温度を高温にしても粘度が低くならず効果が得られなくなってしまう。このため板状粉体や球状粉体の配合量を減らして溶融時の粘性を下げたり、容器形状、材質を変更したりして対応してきたのが現状であった。よって、板状粉体や球状粉体の配合量を高めても、エモリエント感が高く、粉っぽさが無く、化粧持続性に優れる等の品質を有しながら、且つ、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラした仕上がり感を有し、溶融充填性にも優れた油性固型化粧料化粧の開発が望まれていた。

### 【0004】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、上記実状において銳意検討を重ねた結果、リン酸系界面活性剤と特定の板状粉体を特定量配合することにより、エモリエント感が高く、粉っぽさが無く、化粧持続性に優れる等の品質を有しながら、且つ、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラした仕上がり感を有し、溶融充填性にも優れた油性固型化粧料が得られることを見出し本発明を完成させた。更に、本発明の油性固型化粧料に特定の球状粉体を特定量配合したものは、本発明の効果がより優れるものであることが見出された。すなわち、本発明は、成分 (a)、(b)；

(a) リン酸系界面活性剤0.01～3重量%

(b) 平均粒径が1～400μの板状粉体5～40重量%

を含有する油性固型化粧料に関するものであり、更には、成分 (c) として、平均粒径3～50μの球状粉体1～30重量%を含有する油性固型化粧料に関するものである。

### 【0005】

【発明の実施の形態】以下、本発明を詳細に説明する。本発明に使用される成分 (a) のリン酸系界面活性剤としては、起源は特に限定されないが、例えば、大豆、牛乳、牛肝、卵黄等より得られるレシチン及びその水素添加物、リゾ化物等のリン脂質類、ポリエキシエチレンラウリルエーテルリン酸、ポリオキシエチレンセチルエーテルリン酸、ポリオキシエチレンオレイルエーテルリン酸、ジポリオキシエチレンセチルエーテルリン酸、トリポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸、ジポリオキシエチレンノニルフェニルエーテルリン酸等のポリオキシエチレン付加アルキルエーテルリン酸類及びそのナトリウム、カリウム等の塩類、ラウリルリン酸、オレイルリン酸類及びそのナトリウム、カリウム等の塩類、等が挙げられ、これらを一種又は二種以上組み合わせて用いることができる。中でも、レシチン、ポリオキシエチレン付加アルキルエーテルリン酸類及びそのナトリウム、カリウム等の塩類が好ましく、市販品としては、例えば、味の素レシチン（味の素社製）、ニッコールレシノールS-10、S-10E、S-10EX、LL-2

0、ニッコールD D P - 6 及びD D P - 8 (以上、日光ケミカルズ社製)、ホスタファットK W 3 4 0 N 及びK L 3 4 0 N (以上、ヘキスト社製) 等が挙げられる。

【0006】成分 (a) のリン酸系界面活性剤の本発明の油性固型化粧料中への配合量は、配合される粉体の形状、配合量に左右されるが、溶融時の粘性を低下させる効果を得るには0. 0 1 ~ 3 重量% (以下単に、「%」と略す。) であり、好ましくは0. 0 5 ~ 2. 0 %である。配合量が0. 0 1 %未満の場合は溶融時の粘性を低下させる効果を得ることができず、3 %を超えると、化粧膜が油っぽくなりべたつき感、のび広がりの悪さを感じるようになる。

【0007】本発明に使用される成分 (b) の板状粉体としては、形状が板状で平均粒子径が1 ~ 4 0 0  $\mu$  であれば特に限定されないが、例えば、マイカ、セリサイト、焼成マイカ、焼成セリサイト、合成雲母、合成フッ素金雲母、へきかいタルク等の板状粘土鉱物、雲母チタン、酸化鉄処理雲母、酸化鉄・酸化チタン被覆雲母、紺青処理雲母チタン、オキシ塩化ビスマス、酸化チタン被覆オキシ塩化ビスマス、魚鱗箔等の光輝性顔料及び紫外線遮蔽粉体、ポリエチレンテレフタレート、アルミニウム、エポキシ樹脂積層粉末等のラメ剤、シリカ処理雲母、ポリメチルメタクリレート処理雲母、ポリメチルメタクリレート処理雲母チタン、板状酸化チタン、板状酸化亜鉛、板状硫酸バリウム、チッ化ホウ素、板状無水ケイ酸、板状二酸化珪素、N-ラウロイル-L-リジン、ポリエチレン、ポリプロピレン、ナイロン、ポリメチルメタクリレート、ポリスチレン、4 フッ化ポリエチレン等の有機板状粉末等が挙げられ、これらの中から必要に応じて一種又は二種以上を選択して用いることができる。これらの中でも、板状粘土鉱物、光輝性顔料及び紫外線遮蔽粉体が好ましい。また、これら粉体は一種または二種以上の複合化したものを用いても良く、フッ素化合物、シリコーン系油剤、金属石ケン、ロウ、油脂、炭化水素等を用いて公知の方法により表面処理を施したものであっても良い。

【0008】成分 (b) の板状粉体の平均粒径は、レーザー回折式粒度分布測定装置により測定するとき、1 ~ 4 0 0  $\mu$  であり、好ましくは5 ~ 3 0 0  $\mu$  である。板状粉体の平均粒径が1  $\mu$  未満の場合、のび広がりの軽さが無くなり、また、4 0 0  $\mu$  を超えると肌にざらつき感を与える、化粧膜のキメが不均一となるため好ましくない。

【0009】成分 (b) の板状粉体の本発明の油性固型化粧料中への配合量は、粉体の種類にもよるが5 ~ 4 0 %である。板状粉体の配合量が5 %未満であると化粧膜が油っぽくなり、べたつきを感じるようになり好ましくなく、4 0 %を超えるとサラサラして、軽いパウダリーな使用感を得ることはできるが、加熱溶融時の粘性が上昇し溶融充填性が悪くなり好ましくない。

【0010】本発明に用いられる成分 (a) のリン酸系

界面活性剤は、油剤又は粉体と混合して配合することも可能であるが、成分 (b) 板状粉体の一部又は全部に表面処理して配合することも可能である。

【0011】この成分 (a) のリン酸系界面活性剤を成分 (b) の板状粉体に表面処理する方法は、通常公知の方法が用いられる。例えば、水中でリン酸系界面活性剤を粉体表面に吸着させ濾過、乾燥、粉碎させる方法や、有機溶媒中に粉体とリン酸系界面活性剤を分散させ、溶媒を除去し乾燥、粉碎させる方法等が挙げられる。

【0012】本発明に使用される成分 (c) の球状粉体としては、形状が球状で平均粒子径が3 ~ 5 0  $\mu$  であれば特に限定されないが、通常化粧料に用いられる球状粉体が使用可能である。例えば、ナイロンパウダー、ポリスチレンパウダー、ポリテトラフルオロエチレンパウダー、ポリウレタンパウダー、シリクパウダー、セルロースパウダー、シリコンパウダー、ポリメタクリル酸メチルパウダー、ポリメチルシリセスキオキサンパウダー、ポリオルガノシロキサンエラストマーパウダー、ポリエチレンパウダー、ポリ塩化ビニル、ポリプロピレンパウダー、ポリエステルパウダー、ポリアクリロニトリルパウダー、スチレンとアクリル酸の共重合体、スチレンとメタクリル酸の共重合体、シリカ、アルミナ、酸化チタン、酸化亜鉛、酸化セリウム等が挙げられ、これらの中から必要に応じて一種又は二種以上を選択して用いることができる。また、これら粉体は一種または二種以上の複合化したものを用いても良く、フッ素化合物、シリコーン系油剤、金属石ケン、ロウ、油脂、炭化水素等を用いて公知の方法により表面処理を施したものであっても良い。

【0013】成分 (c) 球状粉体の平均粒径は、レーザー回折式粒度分布測定装置により測定するとき、3 ~ 5 0  $\mu$  である。平均粒径が3  $\mu$  未満であると化粧膜に軽い感触を付与することができず、また、5 0  $\mu$  を超えると肌にざらつき感を与えるようになり好ましくない。

【0014】成分 (c) 球状粉体の本発明の油性固型化粧料中への配合量は、1 ~ 3 0 %が好ましく、4 ~ 2 5 %がより好ましい。配合量がこの範囲であると、ペタつかずサラサラした仕上がり感、化粧持続性等の本発明の効果が更に向上する。

【0015】本発明の固型粉末化粧料に使用される、その他の粉体としては、通常化粧料に用いられるものであればいずれでも良く、特に制限を受けるものではない。例えば、体质顔料、無機白色顔料、無機着色顔料、有機顔料、有機粉末が使用可能であり、具体的には、タルク、カオリン、炭酸マグネシウム、炭酸カルシウム、ケイ酸アルミニウム、ケイ酸マグネシウム、ケイ酸アルミニウムマグネシウム、無水ケイ酸、硫酸バリウム、ベントナイト、酸化チタン、酸化亜鉛、酸化アルミニウム、ベニガラ、黄酸化鉄、黒酸化鉄、群青、紺青、酸化クロム、水酸化クロム、カーボンブラック、タール系色素及

びそのレーキ顔料、ナイロン粉末、ポリエチレン末、メチルメタクリレート粉末、結晶セルロース、デンプン等が挙げられる。これら粉体は、化粧目的等に応じて1種または2種以上を選択して用いられ、また公知の表面処理、例えば油剤、シリコーン、フッ素系油剤等で表面処理を施して配合しても良い。

【0016】本発明に用いられる油性成分は、通常化粧料に用いられるものであればいずれでも良く、特に制限を受けるものではない。半固体油もしくは液体油としては鉱物油、植物油、動物油、高級脂肪酸、高級脂肪酸エステル、揮発性油剤、シリコーン油等が使用でき、例えば、流動パラフィン、スクワラン、ポリブテン、ひまし油、ミリスチン酸イソプロピル、パルミチン酸イソプロピル、ラノリン、ワセリン、オリーブ油、ホホバ油、マカデミアンナッツ油、ミンク油、タートル油、アーモンド油、サフラワー油、アボカド油、ミリスチン酸オクチルドデシル、2-エチルヘキサン酸セチル、2-エチルヘキサン酸トリグリセライド等のグリセリン脂肪酸エステル、ジグリセリルイソステアレート等のジグリセリン脂肪酸エステル、ジカプリン酸プロピレングリコール等のプロピレングリコール脂肪酸エステル、ジペンタエリトリット脂肪酸エステル、オレイン酸、オレイルアルコール、ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン等のシリコーン油、パーフルオロポリエーテル等のフッ素系油剤、低分子量のイソパラフィン系炭化水素油、低分子量の鎖状ジメチルポリシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン等の低分子環状ポリシロキサン等の揮発性油剤等が挙げられる。固体油としては、例えば、固型パラフィンワックス、セレンワックス、マイクロクリスタリンワックス、カルナウバワックス、キャンデリラワックス、モンタンワックス、ピーズワックス、モクロウ、ゲイロウ、フィッシャートロプッシュワックス、ポリエチレンワックス、ポリエチレンポリプロピレンコポリマー、硬化ヒマシ油、ロジン酸ペンタエリトリットエステル、ステアリン酸、ラウリン酸、ミリスチン酸、ベヘニン酸、セチルアルコール、ステアリルアルコール、ラウリルアルコール、ベヘニルアルコール等が挙げられ

る。これらの油剤は目的に応じて1種または2種以上を選択して用いられる。

【0017】本発明の油性固型化粧料には、本発明の効果を損なわない範囲で上記必須成分以外に成分(a)以外の界面活性剤、保湿剤、防腐剤、ゲル化剤、キレート剤、pH調整剤、樹脂、酸化防止剤、香料、紫外線吸収剤、美容成分等を適宜配合することができる。

【0018】本発明の油性固型化粧料は、常温で固型もしくは半固型状であり、加熱溶融流し込み充填により製造されるものである。また、本発明の効果が発現しやすい化粧料としては、口紅、ファンデーション、白粉、コンシーラー、アイシャドウ、頬紅、アイライナー、アイブロウ等のメイクアップ化粧料が挙げられる。

#### 【0019】

【実施例】次に実施例を挙げて本発明を更に説明するが、本発明はこれによって何ら限定されるものではない。

【0020】製造例1 レシチン処理雲母チタン  
レシチン(味の素社製:味の素レシチン)3gを精製水1000gに分散させ、平均粒径25μの雲母チタン(マール社製:フランメンコレッド)97gを加えて、混合分散する。この分散液をろ過し、粉体を乾燥させ、レシチン処理雲母チタンを得た。

#### 【0021】製造例2 レシチン処理マイカ

レシチン(味の素社製:味の素レシチン)3gを精製水1000gに分散させ、平均粒径18μのマイカ(山口雲母工業社製:マイカY-2300)97gを加えて、混合分散する。この分散液をろ過し、粉体を乾燥させ、レシチン処理マイカを得た。

#### 【0022】実施例1~6及び比較例1~7油性固型アイシャドウ

表1に示す組成の油性固型アイシャドウを下記方法により調製し、使用した時の、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラした仕上がり感、エモリエント感、化粧持続性、及び溶融充填性の各項目について評価を行った。評価結果を表2に示した。

#### 【0023】

#### 【表1】

	成 分	実施例						比較例					
		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
1	セレシン	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6
2	ジメチルポリシロキサン	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量
3	トリオクタン酸グリセリル	8	10	10	10	10	10	10	10	10	10	8	8
4	流動パラフィン	10	15	15	15	15	15	15	15	15	15	10	10
5	ワセリン	1.5	2	--	2	2	--	2	2	2	2	1.5	1.5
6	レシチン	0.2	0.02	0.2	--	0.2	2.5	--	--	--	--	0.2	0.2
7	ポリオキシエチレン(8モル)ラウリルエーテルリン酸ナトリウム	--	--	--	0.2	--	--	--	--	5	--	--	--
8	モノオレイン酸ポリオキシエチレン(20モル)ソルビタン	--	--	--	--	--	--	0.2	--	--	--	--	--
9	N-ラウロイル-L-グルタミン酸ナトリウム	--	--	--	--	--	--	--	0.2	--	--	--	--
10	マイカ(平均粒径0.5μ)	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	15
11	マイカ(平均粒径3.0μ)	--	--	--	--	35	10	--	--	--	--	--	--
12	マイカ(平均粒径1.5μ)	15	10	--	5	--	5	5	5	5	5	--	--
13	雲母チタン(平均粒径20μ)	10	10	--	10	5	5	10	10	10	10	8	--
14	ラメ剤(注1)	--	--	5	--	--	--	--	--	--	--	--	--
15	球状シリカ(平均粒径1.5μ)	--	15	20	15	5	20	15	15	15	15	--	15
16	球状シリカ(平均粒径100μ)	--	--	--	--	--	--	--	--	--	25	--	--
17	タルク	5	--	15	5	5	5	5	5	5	5	10	5
18	酸化チタン	1.5	--	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
19	群青	0.5	0.1	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
20	ベンガラ	0.5	--	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
21	黄酸化鉄	0.5	--	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
22	赤色226号	0.5	0.3	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
23	ナイロンパウダー	--	5	5	5	--	10	--	--	--	--	5	15
24	保湿成分	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量
25	香料	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量

注1：平均粒径200μの板状ラメ剤(ダイヤケムコ社  
製：DCグリッターシルバーC)

#### 【0024】(製法)

- A. (1)～(9)を加熱溶解する。
- B. Aに(10)～(25)を均一に混合する。
- C. Bを加熱溶解した後、脱気する。
- D. Cを90℃にて加熱溶融し、金皿に流し込み、冷却して油性固型アイシャドウを得た。

#### 【0025】(評価方法及び判定基準)

##### 官能評価

実施例1～6及び比較例1～7の各固型アイシャドウを試料として、専門パネル20名による使用テストを行い、使用した時の、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラした仕上がり感、エモリエント感、化粧持続性について評価を行い、下記評価基準Aによる平均点に基づいて下記判定基準Aにて判定した。

##### (評価基準A)

5点：非常に良好

4点：良好

3点：普通

2点：やや不良

1点：不良

(判定基準A)

◎：4.0点以上

○：3.0以上4.0未満

△：2.0以上3.0未満

×：1.0以上2.0未満

【0026】(溶融充填性評価) 実施例1～6及び比較例1～7の各固型アイシャドウを、90℃に加熱溶融し金皿に流し込む時の、金皿への広がり、表面の平滑性、均一性のレベルを下記判定基準Bで評価した。

(判定基準B)

◎：非常に良好

○：良好

△：やや悪い

×：非常に悪い

#### 【0027】

##### 【表2】

評価結果													
軽いのび広がり	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	△ △	×
サラサラとした仕上がり感	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	△ △	△ △	○ ○	×
エモリエント感	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	△ △	○ ○
化粧持続性	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	△ △	○ ○
溶融充填性	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	×	×	×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○

【0028】表2の結果から明らかのように、本発明の実施例1～6の油性固型アイシャドウは比較例1～7に比較して、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラ

した仕上がり感、エモリエント感、化粧持続性、及び溶融充填性の各項目において優れたものであった。

#### 【0029】

### 実施例7 油性固型ファンデーション

(成分)	(%)
1. ジメチルポリシロキサン	10.0
2. 流動パラフィン	10.0
3. 2-エチルヘキサン酸トリグリセライド	10.0
4. ワセリン	5.0
5. セレシンワックス	7.0
6. ポリオキシエチレン (8モル) ラウリルエーテルリン酸	0.3
7. 酸化チタン	10.0
8. 黄酸化鉄	1.5
9. 黒酸化鉄	0.5
10. ベンガラ	0.5
11. マイカ (平均粒径10μ)	10.0
12. タルク	20.0
13. 板状シリカ (平均粒径35μ)	10.0
14. 球状ナイロンパウダー (平均粒径5μ)	10.0
15. 保湿剤	適量
16. 香料	適量

(製法) 成分(1)～(6)を加熱溶解する。これに(7)～(16)を均一に混合分散し、加熱溶解した後、脱気し、最後に所定の容器に流し込んで油性固型ファンデーションを得た。実施例7の油性固型ファンデー

ションは、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラした仕上がり感、エモリエント感、化粧持続性、及び溶融充填性の各項目において優れたものであった。

### 【0030】

#### 実施例8 皿流し込みタイプロ紅

(成分)	(%)
1. 2-エチルヘキサン酸トリグリセリル	残量
2. ポリブテン	5.0
3. ラノリン	5.0
4. 流動パラフィン	10.0
5. ホホバ油	5.0
6. パラフィンワックス	5.0
7. マイクロクリスタリンワックス	4.0
8. 製造例1のレシチン処理雲母チタン	20.0
9. 製造例2のレシチン処理マイカ	5.0
10. 球状ナイロンパウダー (平均粒径5μ)	10.0
11. 酸化チタン	2.5
12. 赤色202	0.5
13. 赤色201	1.0
14. 黄色4号アルミニウムレーキ	2.0
15. 保湿剤	適量
16. 香料	適量

(製法) 成分(1)～(7)を加熱溶解する。これに(8)～(16)を均一に混合し、加熱溶解した後、脱気し、最後に所定の容器に流し込んで皿流し込みタイプロ紅を得た。実施例8の皿流し込みタイプロ紅は、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラした仕上がり感、エモリエント感、化粧持続性、及び溶融充填性の各項目において優れたものであった。

### 【0031】

【発明の効果】本発明の油性固型化粧料は、エモリエント感が高く、粉っぽさが無く、化粧持続性に優れる等の品質を有しながら、且つ、肌上で軽いのび広がり、ベタつかずサラサラした仕上がり感を有し、且つ溶融充填性にも優れたものである。